

月狂華

‡ Lunar Calendar ‡

星野 澄華

Writed by Sumika Hoshino

夜空の王

空を見上げる

空は低く 雲は近く
月だけが高みにあった

まるで 人々の心に空いた 穴の様
燦然と輝くそれは夜闇を照らす

街の光で消し飛ばされる
貧弱な星を支配して

夜空の王よ 唯一にして冷酷な支配者
私の行いをしかと見よ

蒼き光の中に 闇
闇の中に 我一人

終末

悪がはびこる 悪がはびこる
邪が蔓延し この世の終末はすぐそこに

さあ 歩もう

この汚れきった身体を
穢れきって消滅を待つ混沌に投げよう

正体

私は痛みである
痛みが私の中に横たわり
私は痛みとなって道端に転がっている

私は死である
死が私を包み込み
私は死となって海に漂っている

私は闇である
闇が私を黒く染め
私は闇となって無に帰する

神への冒瀆詩

神は何故 崇拝される？

神は全知全能か？

イヴを創り アダムを生み出した 神よ
蛇に欺かれ 知恵を付けた二人を 凍る大地へ貶めた 神よ

寂しさ 怒りは 我らと同じ
蛇の唆しを防げなかった 貴方に どんな力があると？

人間は何故 神を崇拝する？

人間は無力なのか？

全ての幸福が神によって与えられるなら
この世の災禍もまた神によるもの

神など人間が作り出したまやかさに過ぎぬ

神を信ずるといふのなら

まずは 己を信じよ

そうでなければ始まらぬ

終焉

選ばれし者よ 哀れなる仔羊よ
あの濁流の中に その身を投じよう

そしてその軀朽ち果てる刻
あの煩雑な世界の代わりに 断末魔の叫びをあげよう

我らの喉が潰れるまで 声の限り

あの盲目の世界の代わりに
そこに巣食うものの成れの果て 見続けよう

我らの眼 腐り落ちるまで

この世界で
捧げられる生贄として 犠牲の役を全うすることにしよう

魔術師の夜

乙女の柔肌のように煌めき吸い付く 月光が照らす場所
そこで私は 術を詠う 粉を振るう

蒼の光と 濃藍の闇に彩られた 静寂
騒がしき太陽が司る時間は過ぎ 在るのはただ 静寂

月光石も灰かに輝けば
もう 完成する

我が手より 生まれし精霊が
今 薄青の鱗粉を花卉のごとく舞わせ

月へ向かう

伝えてくれ

私はまだそちらへ赴くことは 叶わぬと

奴隷讃美歌

さあ 働け 奴隷よ
鞭の風切り音 肉打つもの変わる前に

主の罵声と怒声 入り混じる仲間の悲鳴に急かされて
夜も明けぬうちから 重労働

夜が更けるまで働かねば 役立たず
働け 働け 奴隷よ

疲労が病魔を伴い その身を蝕むまで
そのか細い腕を精一杯 振るい

空腹に耐え 寒く冷たい寝床で
その瞳から 苦境に涙しても

それに慣れるな
いつまでも その瞳 輝かせてゆけ

True or False ?

どれが本物？ どれが偽物？

何が真実で 何が虚偽

嘘偽りでないことはそれほど大切？

本物がどんなに人を翻弄し
真実がどんな風に人を打ち砕くか

本当は

これが真でも これが偽でも
どちらでもいいの

存在することだけが

全て

欲望の答え

ある人が言った
君には何でもあげよう
金でも 服でも 好きなものを

いらないわと女は答えた
私が欲しいのは「 」なの

ある人が言った
あたしに何でも頂戴
地位でも 名誉でも 欲しいものを

あげられないよと男は答えた
僕が与えられるのは「 」であって

「我」 は 「死」

疑問

何故 世界はこうなのですか
やつれた男が問うた

疲れたその目は何も見えていない

何故 人は考えるのですか

何故 人は得られる以上のものを求めるのですか

何故 一生懸命働いている者よりも
人を欺き笑う者が利を受けるのですか

何故 人には感情があるのですか

何故 人は人を騙し 傷付け
拳銃に殺してさえしまうのですか

人より 獣の方がずっと高尚だ
だが そう考える己もまた人なのだ

男の眼は視線を虚空に投げる

その眼にはもう何も映らない

その眼は白く濁って乾いていた

世界の命運

知っているかい？　この世界には神様がいる
首を傾げないで
彼が君たちの前に姿を現さないのは　決して彼が無慈悲だからじゃない
忙しすぎるんだ　君たちを守るために

彼の予想に反して恐るべき進化を遂げ　彼が創造した世界を造り替えていく僕らを
退廃し　穢され　腐り落ちるだけの世界を
彼は見捨てることなく　懸命に救おうとしている　戦っている
慈悲の塊である彼は　それを無駄なことだとは考えもしない

尊敬すべきだ　彼を
そして哀れむべきだ　愚かな彼を

彼が対峙する相手は運命
彼らは人間が作り出した興味深い遊戯　チェスに目を付けた
これでどうするか決めようじゃないか
運命がそう囁いた

君がそうまでして人間たちに希望を見出すなら
私が司る破滅を奪ってみるがいいよ
神と運命との一騎打ち
そう言って彼は微笑んだ

神と運命の戦いは始まってからずっと続いている
まだ勝敗はついていない

神が苦しい状況に落ち込むこともあった
世界中で洪水が起こり　地震が起こり　天災が人々を襲った

運命が追い込まれることもあった
新しい発明が認められ　内紛が終結し　自然は見る見る間に刈り取られていった

さあ　今度はどちらが笑みを浮かべることになるのか

ああ　神様　その手は打つべきじゃなかった

もうすぐ運命が高らかにチェックメイトを宣言する

さあ 世界はどうなるのだろう？